

韋應物 悼亡詩論（承前）

——潘岳の哀傷作品との関わり——

黒 田 真美子

はじめに

唐代を代表する自然詩人の一人、韋應物（七三五？～七九〇？）は、妻元蘋（七四〇～七七六）の死を悼み、墓誌銘を記すとともに、数多くの悼亡詩を詠じた。論者は、先に「韋應物悼亡詩論 序説——十九首連構成への懷疑——」（以下「序説」と称す）と題して、現行の十九首連作は、後人（恐らくは、北宋・王欽臣^②）が校訂再編纂したものであり、その他に十一首が悼亡詩と看做せることを明らかにした。詳細は「序説」に譲るが、これは、西晋・潘岳（二四七～三〇〇）を嚆矢とする従前六首の悼亡詩の流れの中で、質量ともに突出している。詩形は、五絶・七絶・五律という近体詩を含み、妻の逝去後、何年にも亘って綿々と詠い継がれている。従来の悼亡詩の定型（一、三首連作、二、五言古詩^③）や没後一年の製作という慣行を、大きく塗り替えることになったのである。これまでの定型や慣行を、悼亡詩の〈小概念〉（狭義）とすれば、韋應

物は〈大概念〉（広義）を提示したといえよう。

拙論は、韋應物の悼亡詩が、潘岳詩以来の流れの中で、どのように位置づけられるかを考察する上で、まず潘岳の哀傷作品との関わりを追求する。それによって韋應物の悼亡詩にいかなる独自性が認められるか、そしてなぜかくも膨大な悼亡詩の出現が可能になったかを明らかにしたい。それは、韋應物詩の本質と深く関わることになろう。

第一章 韋應物 悼亡詩のノスタルジア

まず韋應物悼亡詩（以下、「韋詩」と略す）の多様性を確認するためにも、煩を厭わず、詩題と詩形を挙げることにする。

一「傷逝」五古十二韻、二「往富平傷懷」五古十韻、三「出還」五古六韻、四「冬夜」五古八韻、五「送終」五古十二韻、六「除日」五律、七「對芳樹」五古四韻、八「月夜」五古三韻、九「嘆楊花」

- 五律、十「過昭國里故第」五古十二韻、十一「夏日」五古四韻、十二「端居感懷」五古九韻、十三「悲紈扇」五古三韻、十四「閉齋對雨」五古四韻、十五「林園晚霽」五古五韻、十六・十七「秋夜」二首五律、十八「感夢」五古四韻、十九「同德精舍舊居傷懷」五古四韻（以上卷六「感嘆」所収連作）、二十「過扶風精舍舊居簡朝宗巨川兄弟」五古七韻、二一「四禪精舍登覽悲舊寄朝宗巨川兄弟」五古九韻、二二「寺居獨夜寄崔主簿」五古四韻（以上卷二「寄贈」）、二三「兩夜感懷」五古四韻、二四「發蒲塘驛沿路見泉谷村墅忽想京師舊居追懷昔年」五古八韻（以上卷六「懷思」）、二五「經武功舊宅」五古七韻（卷六「行旅」）、二六「郡齋臥疾絕句」五絶、二七「秋夜」五古四韻、二八「對雜花」五古四韻、二九「夜聞獨鳥啼」五絶、三十「子規啼」七絶（以上卷八「雜興」）。

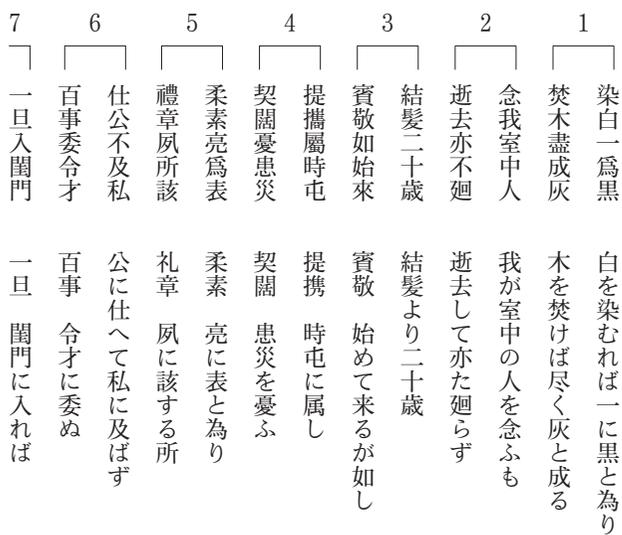
以上、三十篇を拙論の対象作とする。そのうち十九首連作は、一「傷逝」が、妻の永遠の不帰という巨視的時間を詠うが、二からは、季節を軸にして構成され、妻の亡くなった冬（二〜五）から春（六〜十）、夏（十一・十二）、秋（十三〜十八）へと推移しながら、妻亡き悲哀を詠じている。最後の十九は、旧居を再訪しての日暮での感懷で、季節はない。追加した十一首は、季節感は稀薄で、それよりも、「寄贈」「行旅」など部建てに則した要素を含む哀歌になっている。

従前六首にない特異性は、まずこの多角的観点による多様性であり、内容の新しさをまとめれば、つぎの三点が挙げられよう。一、妻像の描出、二、子どもを詠う、三、過去と現在の対比表現である。ただ一、妻

像については、すでに「序説」で、墓誌銘を援用し、妻の兄弟親族も含めて明らかにした。二、子どもを詠うについては、山田和大「子どもを詠む韋応物詩——悼亡詩を中心に——」が詩史を踏まえた考察を行っている。したがって、この二点については簡略に止め、本章では、三、過去と現在の対比表現を中心に論及する。

第一節 妻像の描出

まず一、妻像に関しては、総序ともいうべき一「傷逝」では以下のよう



「四屋滿塵埃 四屋 塵埃に滿つ

8 斯人既已矣 斯の人既に已ぬるかな
觸物但傷摧 物に触れて 但だ傷摧す

9 單居移時節 單居 時節 移り
泣涕撫嬰孩 泣涕して嬰孩を撫す

10 知妄謂當遣 妄を知りて當に遣るべしと謂ふも
臨感要難裁 感に臨んで要するに裁ち難し

11 夢想忽如賭 夢想 忽ち賭るが如く
驚起復徘徊 驚起して 復た徘徊す

12 此心良無已 此の心 良に已む無し
繞屋生藁菜 屋を繞りて 藁菜生す

「白」から「黒」への変化が、明から暗、すなわち生から死への物化のメタファとして印象的に詠い始められるが、第三聯から二十年にわたる結婚生活を顧みて、最後まで変わらなかったとやかで上品な妻像を描出する。

第四聯の「時屯」「患災」とは、安史の乱を指す。元蘋の墓誌銘に拠れば、二人の結婚は、天宝十五載（七五六）八月二十二日、安祿山の長安陥落直後、乱を避けた長安郊外の昭応県（西安市臨潼区）で挙行された。この事實は、韋應物が、玄宗の蜀への逃避行に扈從できなかったことを意味する。彼は少年時代を回顧して、「少くして武皇帝（玄宗を指す）に事へ 無頼にして恩私を恃む」（「逢楊開府」卷五）と詠うように、十代後半、「右千牛」という玄宗の近衛兵として特権階級を享受してい

た。それが彼の誇りであり、精神的支柱でもあったろう。だが安史の乱によって職も財産もすべて失う。さらに扈從に選ばれなかったことは、「序説」でも記したように、彼にとって、いわば生の基盤の瓦解にも等しい打撃であった。その事實は詩集の何処にも記されず、三十年後の回想（「逢楊開府」）でも触れ得ない、深刻な挫折だったのである。かように人生最悪の状況下での結婚だったが、若い二人は「提携」（第七句）して、乱後の荒廃と苦難を乗り越えてきたのである。

第五・六聯では、妻が、人の模範となるようなおだやかな婦礼を弁え、「百事」を任せられる有能さを持っていたと詠う。それは、墓誌銘でも同様に記されており、礼や孝という儒教的婦徳を備え、『詩経』『書経』を暗唱する教養があり、書道にもすぐれていたという。

深沢一幸「韋應物の悼亡詩」がすでに指摘するように、従前の悼亡詩には認められない具体的妻像の描出であるが、単なる妻像だけではなく、注目すべきは、それによって二人の対等ともいふべき関係性をも表現するに至ったことである。それは、十「過昭國里故第」でもつぎのように詠じている。

3 池荒野鈞合 池荒れ 野鈞合し
庭緑幽草積 庭緑にして幽草積る

4 風散花意謝 風散じ 花意謝み
鳥還山光夕 鳥還り 山光 夕る

5 宿昔方同賞 宿昔 方に同に賞するも
詎知今念昔 詎ぞ知らん 今昔を念ふを

(以下略)

「昭國里」とは、長安の朱雀門大街から東第三街にある坊里で、そこに妻と最後に暮らした京兆府功曹參軍時の官舎があった。妻の遺品を収めに行ったときの作である。雑草が鬱蒼と茂って荒れ果てた庭に立ちつくす詩人に夕闇が迫る。同じこの庭を、「宿昔」は二人で「同に」美しさを「賞」したのに今、まさか一人でその昔を偲ぶことになるうとは(第五聯)と、悲嘆に暮れる。後述するように、韋詩の特質である今昔の対比を用いたこの「同賞」は、周知の如く、南朝宋の自然詩人謝靈運の「賞心」(自然の美を探賞する心思)に因む語であるが、それを用いて、二人の趣味嗜好の共通性を詠んでいる。二人の家系が、同じく北朝の名門¹⁰⁾という典型的「門当戸対」の結婚である以上に、「武皇 昇仙して去り／憔悴して人に欺かる」(逢楊開府)という玄宗薨去後の苛酷な状況を、共に苦勞して乗り越えてきたという強い共感が、「永へに手を携ふるの歎を絶たれ／空しく存す 旧行の迹」(第十聯)の「携手」(二十一⑪、二二⑬)、漢数字は冒頭に挙げた悼亡詩作品の通し番号、○囲み算用数字は第何句かを表わす。以下同じ)や「提携」(二⑦)、そして「同賞」や「同往」(二⑱)「同居」(五⑤)「同去」(十九⑥)など「同」の繰り返しによって表白されるのである。

第二節 子どもを詠う

次いで子どもを詠う詩句は、先に挙げた一第九聯の涙を流しながら赤子をあやす自身の姿を詠む以外にも、つぎの詩句(二「往富平傷懷」)

が見える。

	3	4	5	6
	昨者仕公府 昨者は公府に仕へ 屬城常載馳 屬城 常に載馳す	出門無所憂 門を出づるも憂ふる所無く 返室亦熙熙 室に返るも亦た熙熙たり	今者掩筠扉 今は 筠扉を掩ひ 但聞童稚悲 但だ童稚の悲しむを聞くのみ	丈夫須出入 丈夫 須く出入すべきに 顧爾内無依 爾を顧ふに内に依る無し

(以下略)

妻の生時は何の心配もなく公務に走り回ったが、今や陋屋の門扉を閉じて、子ども達の母恋しと泣く声に、胸つぶれる思いをしている。外出する必要に迫られるが、家内に子どもを慈しむ人がいないと、困惑する姿を浮かび上がらせる。ここにも今昔の対比が見られることを留意しておく。

三「出還」(第四聯)では、「幼女 復た何を知らん／ 時に来たりて 庭下に戯る」と、母の死を理解できない子供の無邪気さに、悲傷感を募らせる。この発想は、潘岳「寡婦賦」(「微身の孤弱なるを省み、稚子の未だ識らざるを顧みる」)を踏まえるが、第二章第三節にその関わりを詳述する。

十二「端居感懷」(第四聯)では、「稚子 恩の絶ゆるを傷み／盛時は

流水の若し」と詠み、母の慈愛が流水に呑み込まれるように消えていく。時の流れを「流水」に喩えることは、章詩の時間論の上で、見落とせないが、これらの表現によって、妻の不在と韋應物の喪失感を際立たせ、従前六首には無いリアリティが付与されている。清・沈徳潜が三「出還」について「因幼女之戯而已之哀倍深。比安仁較眞（幼女の戯るるに因りて己の哀倍々深し。安仁（潘岳の字）に比して較々眞なり）」（『唐詩別裁集』巻三）と潘岳よりも真実味に富んでいると評する通りである。この二、子どもを詠む表現についてはこれに止める。

第三節 今昔の対比

つぎに三、今と昔の対句であるが、人口に膾炙している杜甫「岳陽樓に登る」を持ち出すまでもなく、古来、枚挙に遑無い。ただ悼亡詩においては新しいとされる。章詩中の用例を、すでに以下の三例提示した。

一「傷逝」の生前の妻の姿（第三・六聯）と今の「塵埃に満ちた」妻亡き空闊の有りよう（第七・八聯）、十の「宿昔方同賞／詎知今念昔」（第五聯）、二の子どもたちの泣き声を響かせる第三・六聯である。このように今昔の対比は、韋應物悼亡詩に少なからず見い出せる表現であり、それゆえ先行研究は、いずれも章詩の特色の一つとして指摘する¹⁾。だが各論は単に今昔の対比の強調による悲哀の深さを記すに止まる。やや分析的論及としては、中原健二「詩人と妻——中唐士大夫意識の一断面」が、〈今〉の悲哀にひたすら拘泥する悼亡詩の中で、韋應物が初めて過去の時間を詠んだと評している。すなわち過去へと遡及する時間の指摘である。換言すれば、ノスタルジックな時間といえよう。

「ノスタルジア」の語源は、ギリシャ語の *nostos*（家に帰る）と *algia*（苦しんでいる状態＝苦痛）に由来する「郷愁」病という軍隊内の医学用語という²⁾。現代では、脱医学化された幅広い「郷愁」の意に用いられているが、「故郷」に帰りたい（派生的には本来の場所に戻りたい）情動という意味では、原義から大きく乖離していない。F・デーヴィスは、ノスタルジア発生の必要条件として、過去と現在のあざやかな対照、具体的には「良い過去と悪い現在」との内なる対話がかわさされていることを挙げる。その意味で、韋應物悼亡詩に顕著な今（悲）と昔（喜）の対比は、まさにノスタルジア発生の必要条件を満たしているのである。拙論は、この見解を踏まえて、韋應物悼亡詩の時空を分析し、その特質が何を意味するかを考察する。

まず、右に挙げた詩篇の他に、今昔の対比が簡潔に詠われている詩句を挙げよう。

1 昔出喜還家 昔は出づれば家に還るを喜び
今還獨傷意 今は還れば独り意を傷ましむ

（三「出還」）

先行研究は、この今昔の対比は従前の悼亡詩には無いとするが、実際には、齊梁・江淹の悼亡詩「悼室人」（『江文通文集』巻四³⁾）にすでに認められる。

4 「今悲輒流涕 今の悲しみに 輒ち流涕し

「昔歡常飄忽 昔の歡びは 常に飄忽たり

(第二首)

江淹詩との関わりは次に予定しているが、今昔の対比の構図(昔—「同」(妻の存在)喜、今—「獨」(妻の不在)—悲)は江淹から始まるのである。ただしそれはあくまで「悼亡詩」という系譜においてであり、哀傷作品に広げれば、潘岳が妻楊氏の死を哀悼した「哀永逝文」に遡及できる。第二章第二節で触れたい。

いずれにしても従前作にはない点として、「出還」という空間移動を伴っていることは、注目に値する。このほか草詩は「今昔」という語を用いず、つぎのように過去と現在の内容的対比を描いている。

1 思懷耿如昨 思懷 耿として昨の如きも
季月已云暮 季月 已に云に暮る

2 忽驚年復新 忽ち驚く年の復た新たなるを
獨恨人成故 獨り恨む 人の故と成るを

(六「除日」)

2 舊賞逐流年 旧賞 流年を逐ひ
新愁忽盈素 新愁 忽ち 素に盈つ

(九「歎楊花」)

六では、時の流れの早さに驚かされつつ、時がたっても変わらぬ「恨」

情を「新」「故」の対比で詠じている。九も「今」の時間を「舊」と対比させて「新」で表し、妻との思い出に耽って新たにわかあがる「愁」に身を任せている。ここで留意すべきは、「今と昔」の簡潔な対比では隠されている、その間に流れる時間が明確に詠われていることである。それは、先に前半を引いた二「富平傷懷」の後半にも見える。

7 銜恨已酸骨 恨みを銜みて已に酸骨たり
何況苦寒時 何ぞ況や苦寒の時に於いてをや

8 單車路蕭條 單車 路 蕭條たり
回首長逶遲 首を回らせば 長く逶遲たり

9 飄風忽截野 飄風 忽ち野を截り
嘹唳雁起飛 嘹唳 雁 起ちて飛ぶ

10 昔時同往路 昔時は同に路を往くも
獨往今詎知 獨往 今詎ぞ知らん

「富平」とは、京兆府高陵県の東北七十里の地名。当時、韋應物は、功曹参军と高陵県令を兼任していた。何らかの官務のため、彼は「恨」情を抱いたまま、人氣無い道に車を走らせている。時折つむじ風が身を切るように巻き上がる荒野の中、後ろ髪を引かれる思いで振り返ると、道が長く遠くどこまでも伸びている。心象風景もしくは人生の比喩ともいえるこの道を「昔時」は二人で歩んだが、「今」思いもよらず一人で行くことになろうとは、と反語で強く訴える。これも今昔の対比であるが、末句の「獨往今詎知」の「今」は、説明を要するであろう。無論、

現時点の「今」であるとともに、それは「知る」由もなかった「昔」の時点からみた「今」なのである。いわば、過去が流れ込んだ現在といえよう。同じ表現で、それをより明確に詠うのは、先に挙げた十「宿昔方同賞 詎知今念昔」である。二人で庭の美しさを愛でた昔、その時を一人思い出す今が訪れようとは、昔はつゆも思わなかった。「詎知」の時点は、いずれも「昔」なのである。すなわち章詩の「今昔」は断絶した今と昔ではなく、通底連続している。「今」の時間から「昔」にもどり、「昔」から、「今」に流れている。まさに「旧」(昔)から「流年を逐ひ」「新」(今)に至るのである。それを可能にしているのが、荒野にはてしなく伸びている「蕭條」たる道ではあるまいか。昔と同じ道を歩みながら、彼は昔の世界に入っていく。繰り返し「路を往く」のは、今昔の往還を意味していよう。章詩のノスタルジックな時間は、空間と緊密に関わっているのである。つぎの詩篇でも、それを看取出来る。

十九「同徳精舎舊居傷懷」

洛京十載別	洛京	十載の別れ
東林訪舊扉	東林	旧扉を訪ふ
山河不可望	山河	望む可からず
存歿意多違	存歿	意 違ふこと多し
時遷迹尚在	時遷	迹尚ほ在り
同去獨來歸	同に去りて	独り来り帰る
還見窗中鵲	還た見る	窗中の鵲 <small>はと</small>
日暮繞庭飛	日暮れて	庭を繞りて飛ぶ

妻没後六年の建中三年(七八二)、滁州(安徽省)刺史として赴任途中、十年ぶりに洛陽の旧居を訪れた時の作。変わらぬ山河は辛くて望み見られないと訴えた後、第三聯出句では、時が流れても旧跡はまだ存在していると、今昔の連続性を確認する。落句では昔一人で去った場所に、今一人「帰って来た」と、今昔の対比を詠いながら、空間的回帰を果たしている。当該詩のみならず、彼は「旧居」(二十、二四)「故第」(十)「旧宅」(二五)「故地」(二、二二)を再訪しての傷懷を詠う。従前六首には見られないこの空間移動は、まさに nostos(家に帰る)の擬似行為ではないか。すなわち彼のノスタルジアの強烈な能動性を表している。

最後にもう一点、従前悼亡詩にない要素を指摘すると、以下のように、韋應物の「老」の意識が詠われていることである。

5	咨嗟日復老	咨嗟す	日々復た老ゆるを
	錯莫身如寄	錯莫として	身寄するが如し
3	晚歲淪夙志	晚歲	夙志 淪み
	驚鴻感深哀	驚鴻	深哀を感ず
2	坐念綺窗空	坐るに念ふ	綺窗空しきを
	翻傷清景好	翻って傷む	清景の好きを
3	清景終若斯	清景	終に斯くの若し
	傷多人自老	傷多く	人 自ら老ゆ

(四「冬夜」)

(三「出還」)

(八「月夜」)

蟬聯体として反復される「清景」が「好」ければよいほど、かつてはそれを「同賞」した妻の喪失を思い知らされる。残された詩人は、自意識として早や晩年に属すとす。四十歳初めという年齢は、当時としては、老年と看做されていたのかもしれない。だがそれよりも、老い衰えたと詠むことで、痛手の大きさを表現しよう。また「老」を詠むことは、「若」からの時間の推移、すなわち昔から今への流れを意識している。その流れの中での「今」を「傷多」しとする認識は、先述のノスタルジア発生条件の「悪い現在」そのものである。ノスタルジアは、人生の移行期、不確実で、将来の不安が濃厚な時期に発生しやすいとされる。老年期は、幾重にも喪失が重なり、死という根源的不安が身近に迫ってくるため、その情動に、より親しみやすいという⁽¹⁵⁾。詩人は「老」意識を詠むことで、自らをノスタルジアの世界へと誘ったのではないか。それは、もはや過去の現実ではあり得ない、彼が作り上げた非現実の不可視の世界、一種の仮構といえよう。ノスタルジアは、悲哀に満ちた今の時空を超えさせ、詩人を虚実のあわいにたゆたわせることを可能にする⁽¹⁶⁾。その一つが、十八「感夢」という悼亡詩で初めての「夢」である。

- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| 2 | 髣髴觀微夢 | 髣髴として微夢に觀 <small>み</small> ひ |
| | 感嘆起中宵 | 感嘆して中宵に起つ |
| 3 | 綿思靄流月 | 綿思 流月 靄たり |
| | 驚魂颯廻颯 | 驚魂 廻颯 颯 <small>さ</small> たり |

「微夢」という彼の好尚を表す「微」⁽¹⁷⁾を冠したはかない夢であるが、ここでは、夢の内容は語られない。それが描かれるのは、韋詩を継承した元稹の「夢井」「江陵三夢」を待たなければならぬ。だが綿々たる思いは、靄にけぶるあえかな月光にたゆたいたいながら果てしなく続く(つむじ風に断ち切られるまで)。上の二語と下の三語(「綿思」と「靄流月」との距離の微妙さが独特の余韻をもたらして、韋詩の特質と評される「幽」なる世界⁽¹⁸⁾がたちあらわれる。それは次の詩に、より明らかである。

二二「寺居獨夜寄崔主簿」

- | | |
|-------|--|
| 幽人寂不寢 | 幽人 寂として寝ねず |
| 木葉紛紛落 | 木葉 紛紛として落つ |
| 寒雨暗深更 | 寒雨 深更に暗く |
| 流螢度高閣 | 流螢 高閣を度る |
| 坐使青燈曉 | 坐ろに青灯をして曉 <small>あけ</small> らかならしむれば |
| 還傷夏衣薄 | 還た夏衣の薄きを傷む |
| 寧知歲方晏 | 寧ぞ歲 <small>とき</small> の方に晏 <small>く</small> るを知らんや |
| 離居更蕭索 | 離居 さらに蕭索たり |

自らを「幽人」とよぶ詩人は、寂寞たる思いを抱えたまま、眠りにつけない。初秋の夜は更けゆくほどに冷え込み、寒々しい雨が一層、夜の闇を暗くする。ふと気がつけば、螢が光の尾を引きながら過ぎり飛ぶ。音もなく緩やかに流れる光は、部屋の闇をかえって深め、現実感を稀薄にする。詩人は、すぎるように明かりをとまず。ゆらゆら揺れる青い炎

の中に浮かび上がる妻の姿。詩人はもはや「歳の暮れ」にも気づかない。南宋・劉須溪が「幽情より発して、遂に凄境に入る」と評す¹⁹⁾ように、彼は、まさに現実の時空を超えた「幽」なる「凄境」にたゆたうのである。韋應物の「幽」なる空間は、右の如く彼のノスタルジアが必然としたのではないだろうか。

以上のように、韋詩の今と昔は、単なる対比ではなく通底連続しており、往還する空間移動を伴っていた。それは、帰郷（本来の場所）、換言すれば根源的トポスへの回帰をめざすノスタルジックな時空であり、韋詩の特質である「幽」なる世界とも関わる事が明らかになったのである。それが韋應物詩全体でいかなる意味を有するかは、続編で考察することに、拙論では、つぎに悼亡詩の嚆矢、潘岳詩賦との関連を審究する。

第二章 潘岳詩賦との関わり

胡旭『悼亡詩史』（第二章第二節）は、韋應物悼亡詩の創作上の独自性について、詩語の平易さ、情景の融合、白描法・対比法を用いていることと論じており、いずれも首肯しうる指摘である。そして「後人を驚かせ羨望させるほどの成果を成し遂げた」と評価した上で、「微瑕」として前人の作を踏襲しすぎると批判する。拙論第一章では韋詩の斬新さを論述したが、その一方、事ほど左様に彼は少なからず先行作を踏まえ、典故として用いている。したがって、胡氏の批判の可否はひとまず置いて、韋詩が従前の悼亡詩といかなる関わりがあるかを、考究すべきであ

ろう。拙論では潘岳の哀傷作品（「悼亡詩」「悼亡賦」「哀永逝文」「寡婦賦」）を対象に論じたい。

第一節 潘岳の悼亡詩との関わり

まず潘岳悼亡詩（以下、「潘詩」と略す）との関わりであるが、深沢論文が「詩語、構想の点で潘詩を模倣」していると説くのを初め、先行研究のいずれもがすでに論及している。拙論では、付加した十一首をも対象にして、その不足を補い、新たな知見を加えたい。

潘詩の三首は、第一首の春から夏を除いて秋（第二首）冬（第三首）へと流れる構成である。韋詩の十九首構成が季節を基軸にするのは、潘詩の影響と考え得るが、「序説」で明らかにしたように、それは後人が、潘詩に倣って構成したのであり、韋應物自身の構想ではない。ただその構成が可能になるのは、韋詩自体が季節の移ろいを意識して背景に詠んでいるからであり、「潘詩」と無関係ではあるまい。その点だけを押さえて、両詩の関わりをさらに分析する。

「潘詩」は三首とも長編なので、韋詩との同一詩語が最多の第三首のみ掲げることとする（『文選』卷三二）。

- | | |
|---------|---------|
| ① 曜靈運天機 | ② 四節代遷逝 |
| ③ 凄凄朝露凝 | ④ 烈烈夕風厲 |
| ⑤ 奈何悼淑儷 | ⑥ 儀容永潛翳 |
| ⑦ 念此如昨日 | ⑧ 誰知已卒歲 |
| ⑨ 改服從朝政 | ⑩ 衷心寄私制 |

- | | |
|---------|---------|
| ① 茵幃張故房 | ⑫ 朔望臨爾祭 |
| ⑬ 爾祭詎幾時 | ⑬ 朔望忽復盡 |
| ⑮ 衾裳一毀撤 | ⑯ 千載不復引 |
| ⑰ 臺齋葺月周 | ⑱ 戚戚彌相慙 |
| ⑲ 悲懷感物來 | ⑳ 泣涕應情隕 |
| ㉑ 駕言陟東阜 | ㉒ 望墳思紆軫 |
| ㉓ 徘徊墟墓間 | ㉔ 欲去復不忍 |
| ㉕ 徘徊不忍去 | ㉖ 徙倚步踟躕 |
| ㉗ 落葉委埏側 | ㉘ 枯荇帶墳隅 |
| ㉙ 孤魂獨瑩瑩 | ㉚ 安知靈與無 |
| ㉛ 投心遵朝命 | ㉜ 揮涕強就車 |
| ㉝ 誰謂帝宮遠 | ㉞ 路極悲有餘 |

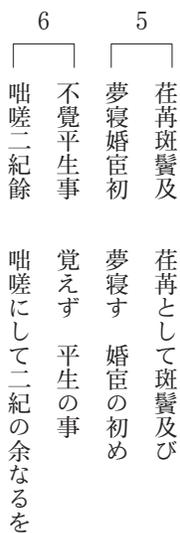
「潘詩」第三首は、冬の詩である。巨視的時間の推移（①②）から始め、冬の厳寒（③④）を背景に、永遠に帰らぬ妻の死を嘆く（⑤⑧）。やむなく身は宮仕えに従っているが、妻の死を悼む心は変わりなく部屋祭壇に託している（⑨⑫）。時が過ぎてても哀しみは深いまま（⑬⑯）。その思いにひきまざるように墓に出かければ、いつまでも墓の周りを立ちもとおる姿が詠まれている（⑰⑱）。最後は、その哀しみを断ち切って、官務に励まねばと自らを叱咤する。

齋藤希史「潘岳〈悼亡〉詩論」²²⁾は、「潘詩」各首の内容をモチーフで整理して、三首間の有機的連関を明示する。右の第三首については〈季節〉〈妻の死の永遠〉〈亡妻の祭り〉〈空室の悲哀〉〈墓への登高徘徊〉

〈悲哀とその切断〉の六モチーフから成るとする。さらに〈季節〉を、巨視的俯瞰的季節と微視的即時的季節に分類し、前者が〈妻の死の永遠〉と対照されるのに対して、後者は〈空室の悲哀〉と関わり、〈妻の不在・喪失〉を伴うとして、モチーフ間の連関を指摘する。

右のモチーフを「章詩」において調べれば、以下のように「潘詩」を踏襲しながらも章應物の独自性を看取し得る。

〈巨視的俯瞰的季節〉は、「單居 時節移り／泣涕して嬰核を撫す」
 「一」傷逝」¹⁷⁾、「奄忽として時節を逾え／日月其の良きを獲たり」¹⁵⁾
 「送終」¹⁾ など多くは時の推移の早さを嘆く詩句として詠われている。
 「潘詩」第一首冒頭「荏苒^{しんぜん}として冬春謝り／寒暑忽ち流易す」と、ニュアンスを同じくする。だがいずれも〈妻の死の永遠〉と対照されていない。章詩で詠まれるのは、妻と共に過こした時間である。



（二四）發蒲塘驛：追懷昔年

「斑鬢（白髪交じりの鬢の毛）」も潘岳の「秋興賦」に見える語で、「荏苒」とともに、潘岳の影響を認め得るが、章應物が夢の中で思うのは、新婚時代からあっといいう間に過ぎた「二紀」（二十四年）を超える歲月である。この語は、第二節で対象とする「悼亡賦」第一聯に見える

ことを留意しておく。

ここに詠われる時間表現は、昔を起点として次第に今の「斑鬢」に至り、今の時点から「婚宦の初め」にたち戻っていく長くて短い妻と共に過ごした時間の回顧である。第一章第三節で論じた今昔の往還によるノスタルジアを見出せよう。すなわち韋應物は潘岳詩賦の俯瞰的時間に触発されて、自らの時間を獲得したのである。

〈微視的即事的季節〉は「自然詩人」と冠される韋應物ゆえ、枚挙に遑ない。従って「潘詩」第三首に即して冬の詩に限る。「晨に起きて嚴霜を凌ぎ／慟哭して素帷（服喪の白いとばり）に臨む」（二「往富平傷懷」第一聯）、「室に入れば掩はれて光無く／哀を銜みて虚位を写す／悽悽として幽幔動き／寂寂として寒吹に驚く」（三「出還」第二・三聯）など、いずれも〈空室の悲哀〉と室内の祭壇（亡妻の祭り）を想起させ、潘詩同様の季語を含んでリアリティを醸しだしている。

このほか胡旭氏の指摘する「景情融合」という詩人の心象風景と解し得る詩篇も認められる。先に引いた「飄風忽ち野を截り／嘹唳 雁起ちて飛ぶ」（二第九聯）は、まさに詩人の胸中を吹き荒れる哀号ではあるまいか。その哀しさゆえ、美しい春の自然を目にしても、詩人の心は晴れない。

3 「風條灑餘露 風條 余露を灑らし
露葉承新旭 露葉 新旭を承く

（七「對芳樹」）

清らかな池畔に立ち並ぶ「芳樹」の枝が風に揺れて、消えかかる春霞を散らし、露を帯びた木の葉が、みずみずしい朝の光を受けて輝いている。しかし詩人は「此に對して人心を傷ましむ」と詠う。なぜならそれは「還た故時の緑の如し」、すなわち妻と共に愛でた「故時の緑」だから。

このように、「草詩」の〈微視的即事的季節〉は、必ずしも〈空室の悲哀〉に限定されず、外へと広がり、外的情景を悲哀感情と結びつけて詠む。「潘詩」の〈即事的季節〉表現と連関する〈空室の悲哀〉が媒介して、そのモチーフが内在する〈妻の不在・喪失〉の思いが詩人を突き動かすように、外へと導き出したのである。

〈季節〉という「潘詩」のモチーフが、巨視的、微視的にかかわらず、韋應物を触発し、世界を広げて、独自の詩境を築かせた。韋應物の側からいえば、「潘詩」を擬することで、自らの世界を構築し得たのである。〈妻の死の永遠〉はすでに挙げた草詩「傷逝」第一・二聯に「我が室中の人を念へども／逝去して亦た回らず」と見えるが、それに続くのは「結髪より二十載／寶敬始めて来るが如し」という妻の思い出である。或いは、「存没 闊として已に永く／悲しみ多く欲び自ら疏し」（二四第七聯）「山河望む可からず／存没 意違ふこと多し」（十九第二聯）「生平 此の居を同にするも／一旦存亡を異にす」（五第三聯）と詠んで詩

- | | | |
|---|-------|--------------|
| 1 | 迢迢芳園樹 | 迢迢たり芳園の樹 |
| | 列映清池曲 | 列ねて 清池の曲に映す |
| 2 | 對此傷人心 | 此に對して人心を傷ましめ |
| | 還如故時綠 | 還た故時の緑の如し |

人(存)と妻(没)が対比されている。この表現は、第一章第一節で述べたように、二人で苦難を乗り越えてきた夫婦としての共感がもたらしたのではあるまいか。それゆえの喪失感の深さが響いてくる。その一方、「一旦闌門に入れば／四屋塵埃に満つ／斯の人既に已んぬるかな／物に触れて但だ傷摧す」(一第七・八聯)と「潘詩モチーフ」では、〈微視的季節〉と結びつく〈空室の悲哀〉と連関する。韋應物は、「潘詩」のモチーフ間の緊密な縛りに拘泥せず、自由に模擬性を追求する。

〈墓への登高徘徊〉は右の五「送終」の詩句に続いて「斯須するも亦た何の益かあらん／終に復た山岡に委ぬ」(第四聯)と詠う。出棺から埋葬を終えても、詩人は「独り留まりて還るを得ず／去らんと欲して中腸結ばる」(第十聯)と立ち去りがたい思いで徘徊し、潘岳の姿と重なって行く。

右の如く、「潘詩」の五モチーフはすべて認められるが、「韋詩」は唯一、「悲哀の切斷」を欠く。「潘詩」の「悲哀の切斷」の具体的内容は、第三首^㉓と^㉔で詠まれるように、いつまでも嘆き悲しまず、早く官務に復帰しなくてはいけないと自らを叱咤激励するものである。無論、それができないことを暗に含んで逆説的に悲哀を表現しているが。この現実回復への方向を「韋詩」が欠くことは、「韋詩」のノスタルジアを想起すれば、当然の帰結といえよう。彼は妻との永遠の別れを詠じた後、「高秩は美と為すに非ず／闌干として涙裾に盈つ」(二四第八聯)と出世を判然と否定する。「潘詩」の現実的要素を捨象否定することで、自らの悲哀表現の有りようを明確にしたのである。

以上のように、「韋詩」は、「潘詩」の詩語やモチーフを模擬し、その

触媒によって自らの詩境を広め、独自の展開を繰り広げた。その一方、自らの特質とは相容れないモチーフは、明確に拒否している。しかしそれも「潘詩」を基にしてこそ、方向性がより分明になったのではあるまいか。その意味で、「韋詩」の「潘詩」との関わりの深さが看取される。さらにその本質を考究すべきであろう。

第二節 潘岳「悼亡賦」「哀永逝文」との関わり

潘岳は妻楊氏の死を悼む作品として、ほかに「悼亡賦」「哀永逝文」を綴っている。「悼亡賦」(以下「潘賦」と称す)の現存作は、二十韻四十句から成り、主に二聯と三聯毎に換韻して、内容や場面を展開している。第一・二聯は、

伊良嬪之初降 伊れ良嬪の初めて降りしより

幾二紀以迄茲 二紀に幾くして以て茲に迄ぶ

遭兩門之不造 兩門の不造に遭ひ

備荼毒而嘗之 備さに荼毒をば之を嘗む

と始め、先に引いたように「二紀」に亘る結婚生活の苦勞を回顧する。

その後、第三聯からの概要は以下のとおりである。①妻の死の永遠(第三と五聯)、②冬の夜、殯室での葬送の準備(第六と十聯)、③聡明で分身といふべき妻の存在と喪失の悲哀(第十一と十四聯)、④殯室からの移葬(第十五聯)、⑤空室の悲哀と虞祭(埋葬後のたまやすめの祭り、第十六と十八聯)、⑥春の訪れ(第十九、二十聯)。

第十四聯までは、「襲時服於遺質(時服を遺質に襲ね)／表鉛華於餘顏(鉛華を余顔に表す)」死装束や化粧など葬送前夜の慌ただしい準備が具

体的に記され、その間に妻の思い出とそれに伴う悲哀が、つぎのように吐露される。

11 且伉儷之片合
垂明哲乎嘉禮
且つ伉儷の片合するや
明哲を嘉禮に垂る

12 苟此義之不謬
乃全身之半體
苟くも此の義の謬らざる
乃ち全身の半体なり

13 吾聞喪禮之在妻
謂制重而哀輕
吾は聞く喪禮の妻に在るや
制は重くして哀は軽しと謂ふを

14 既履冰而知寒
吾今信其緣情
既に冰を履みて寒きを知り
吾は今其の緣情に信す

「伉儷(妻)」としての妻の聡明さは、結婚当初より変わらず、まさにわが身の分身だったと評価し、いくら喪禮を厚くしても悲哀の重さは変わらず、身も心も寒い今の哀情に身をまかせほかないと歌う。

この「兮」を用いない「三言+虚辞(之・以・而・於など)十二言」という騷体は、両漢には見えず、魏晋に数多く現れた新形式で、本来「兮」が置かれる「句腰」に、虚辞を置いて、新味を出している。⁽²⁶⁾また内容的には、この第十四聯までが、殯室内での情景と悲哀で、次からは棺を外に移葬する動きになり、形式も以下のように変える。

第十五聯「夕既昏兮朝既清(夕べは既に昏くして朝は既に清く)／延爾族兮臨後庭(爾が族を延きて後庭に臨む)」は、親族を引き連れて、棺を殯室から後庭にある祖廟に移す情景である。⁽²⁷⁾この形式は、右の如く

「兮」を用いた『楚辞』九歌に基づく「二または三言+兮十二または三言」という騷体⁽²⁸⁾で、同型が最後まで続く。ところが内容的には、次の第十六聯は、これまでの時系列の流れを断ち切り、送葬・埋葬場面を省いて、唐突に埋葬後帰宅しての「空室」の悲哀を詠む(概要⑤)。二場面が脱落した蓋然性も否定できないが、まさにその場面を補うかのように詠われているのが、「哀永逝文」なのである。

「哀永逝文」(以下、「哀文」と称す)は、『文選』(巻五七)の「哀(上)」という部建ての中に、唯一収録され、また明・徐師曾『文體明辯』「哀辭」にも代表作として収められている。徐は「哀辭とは死を哀しむの文なり。故に或いは文と称す」(小序)と説き、「其の文は皆韻語を用ゐて四言、騷体」と記したうえで、当該作をこのジャンルの古辭の嚆矢として置く。つまり「潘賦」とはジャンルを異にして分類する。しかしながら、その内容、形式ともに次のとおり、きわめて近似する。

歌い始めは、棺が門のそばに置かれて送葬への出発を待つばかりの光景である。

啓夕兮宵興 啓夕 宵に興くるも

悲絶緒兮莫承 緒を絶ちて承くる莫きを悲しむ

俄龍輻兮門側 俄かに龍輻(棺)門側にあり

嗟俟時兮将升 嗟^あ時を俟ちて将に升らんとす

嫂姪兮悼惶 嫂姪は悼惶^{しやうこう}し

慈姑兮垂矜 慈姑は垂矜す

聞鳴鷄兮戒朝 鳴鷄を聞きて朝を戒むれば(告げる)

咸驚號兮撫膺 咸驚號兮撫膺ななして膺むねを撫なづ

「啓夕」は、送葬前夜、殯を「啓」いて祖廟に移す時を表す。すなわち「潘賦」第十五聯に重なる。兄嫁、姪、母堂の慟哭が響いてくるような臨場感溢れる描写であるが、この時を起点として、墓地までの野辺送りの光景、次いで棺を墓中に下ろす埋葬が展開し、帰宅後の殯室での「反哭」で終わる。最後は「潘賦」第十六聯に重なり、第十五聯と第十六聯の間に欠落している啓殯から反哭までの流れが、まさに符牒を合わすかのように詠われている。この「哀文」を補うことによって、送葬の流れが途切れることなく展開するのである。

そして「反哭」までの流れの間に、
今奈何兮一舉 今奈何ぞ一舉し

邈終天兮不反 邈として終天反らざる
という「妻の死の永遠」や、「潘賦」と同様の悲愴が、切々と謡われる。

悽切兮増歎 悽切にして歎なげきを増し

俯仰兮揮淚 俯仰して涙を揮ふ
想孤魂兮眷舊宇 孤魂を想ひて旧宇かきりみを眷かれば
視倏忽兮若髣髴 視ること倏忽として髣髴たるが若し

この形式は、右の詩句で明らかかなように、「潘賦」第十五聯以降に用いられているのと同じ九歌型の騷体である。そうすると、「潘賦」が第十五聯以降、なぜ「九歌」型に変更したかが、以下のように推論でき

よう。

二篇の成立時期については、胡旭氏の説くように、「哀文」が先に成り、その後、「潘賦」が作られたと考えられる。端的にいえば、「哀文」は送葬前夜から「反哭」までの一日を背景とするのに対して、「潘賦」は「冬夜」から「春風」までの比較的長い時間が詠まれているからである。したがって、「潘賦」は前半第十四聯まで脱「兮」の新型を用いるが、送葬・埋葬場面は、先に成った「哀文」があるので省略する。その代わりに第十五聯以降、「九歌」型形式に変えることによって、「哀文」を想起させ、流れを中断しなくてすむことを意図したのではないだろう

か。
以上のように、「悼亡賦」「哀永逝文」の二篇は、ジャンルを異にするとはいえず、内容・形式ともに、分かちがたく結びつき、相補関係にあるといえよう。

さてこの二篇と韋應物の悼亡詩との関わりであるが、まず「悼亡賦」との関連に言及する。「韋詩」の特質として、第一章で指摘したように、結婚生活の回顧が挙げられるが、先述の如く、「潘賦」冒頭の「二紀」が韋詩に「覚えす 平生の事／咄嗟にして二紀の余なるを」（二四「發蒲塘驛：追懷昔年」第五・六聯）と用いられている。それはたまたま同じ二十年あまりの結婚生活だったからかもしれないが、潘岳「悼亡詩」には見えないこの語を用いたのは、やはりある種の共感の為せるわざであろう。それゆえ、この発想は、「韋詩」第一首、狭義の悼亡詩といえる「傷逝」の「結髮より二十載／賓敬始めて来るが如し」（第三聯）にも認められる。次いで、「韋詩」は「潘賦」の「不造」「荼毒」という結

婚生活の辛苦に相当する「時屯」「患災」（第四聯）を詠う。その後の「潘賦」は、「芬華之芳列」「全身之半体」という妻の美質を表すが、「韋詩」も「柔素亮に表と為り／礼章夙に該する所なり」「公に仕へて私に及ばず／百事令才に委ぬ」（第五・六聯）と妻を称賛する。すなわち二篇前半の〈回顧〉〈苦勞〉〈妻の美質〉という構成が一致する。いずれも「潘詩」には認められないモチーフと構成であり、「韋詩」は、「潘賦」を踏まえて詠んだと考えられよう。先行研究は、既述の如く、「妻像の描出」（第一章第一節）を「韋詩」の新しさと評するが、この「潘賦」にその源を看取しうるのである。

また「潘賦」の第十六、十七聯は、

入室兮望靈座　空室に入りて靈座を望み

帷飄飄兮燈熒熒　帷とほは飄飄として燈は熒熒たり

燈熒熒兮如故　燈は熒熒として故の如く

帷飄飄兮若存　帷は飄飄として存するが若し

と埋葬からの帰宅後、妻亡き虚しさをふわふわ翻る帳に託し、畳語を含む蟬聯体を用いて詠っている。これは、「韋詩」では、

入室掩無光　室に入るも掩はれて光無く

銜哀寫虛位　哀を銜みて虚位に寫す

悽悽動幽幔　悽悽として幽幔動き

寂寂驚寒吹　寂寂として寒吹に驚く

（三「出還」第二、三聯）

と逆に光を無くしたおぼろな部屋ではあるが、同様に畳語を用いて帳を寒風に翻させている。

最後に時は冬から春に移り、「潘賦」は、

春風兮泮冰　春風　氷を泮とかし

初陽兮戒温　初陽　温を戒む

と詠む。「韋詩」も春の始まりを、六「除日」（第三聯）で

冰池始泮緑　冰池　始めて緑に泮けて

梅援還飄素　梅援（柳）還た素を飄す

と緑と白の爽やかな色彩対を用いて詠んでいる。二篇共に「泮冰」とい『詩經』邶風「匏有苦葉」を出自とする語を用いているが、注目すべきは、句内の構造である。「韋詩」は「潘賦」の「兮」を、「始」「還」という虚字に置き変えただけで、「主語＋述語＋目的語」という同一の

構造を作っている。先に挙げた楮斌傑氏のまとめの如く、「兮」は助辞と同じ用法と意味を持っているが、韋應物はそれを敷衍し、虚字に変換して、五言詩を作ったのである。そうした観点から「韋詩」の諸作を検討してみると、五言の第三字に虚字を置く構造の句は、枚挙に遑ない。

一「傷逝」で示せば、「柔素亮爲表／禮章夙所該」「夢想忽如睹／驚起復徘徊」などである。すべてが「兮」の代替という牽強付会は無論、避けるべきであるが、少なくとも、韋應物がジャンルの異なる辞賦からも、詩語・発想・構成・構造も含めて、果敢に模したことが明白になったといえよう。

つきに送葬・埋葬を詠んだ「哀文」との関わりであるが、「韋詩」五「送終」はまさに送葬詩である。「送葬詩」は、『文苑英華』卷三〇五悲悼五、送葬の収録作からも明らかのように、六朝から始められ、唐代に入ると太宗李世民、皇甫冉、顧況らが詠んでいる³¹。だがいずれも家臣、

友人や上司を対象とし、妻を対象としてはいない。韋應物を触発して悼亡詩に初めて送葬詩を作らせた直接の契機は、やはり「哀文」であろう。

「送終」は、「奄忽として時節を逾え／日月其の良きを獲たり」と占卜によって埋葬の日を決めたことから歌い始め、「蕭蕭として車馬悲しみ／祖載（棺を載せた車）中堂より発す」（第二聯）と野辺送りを開始する。「哀文」は先述の如く、出発までに家族も含めた哀号を響かせるが、韋詩では、それを抑制し、馬の嘶きで表している。

悲しみのために立ちもとおりながら遅々たる歩みの中で、「哀文」にも、「馬は首を廻らせて旆はたを旋す」と馬が登場するが、その後、

昔同塗兮今異世 昔は塗を同じくするも 今は世を異にし
憶舊歡兮增新悲 旧歡を憶ひて新悲を増す

（第二十聯）

と「今昔」「新旧」の対比を呈する。この「旧歡」「新悲」は第一章で論究したノスタルジー発生の必要条件そのものである。ここに韋詩のノスタルジー表現の原点を認めても、あながち的外れではあるまい。

また「送終」の第三聯では、

生平同此居 生平 此の居を同じにするも
一旦異存亡 一旦 存亡を異にす

二「往富平傷懷」末尾にも

昔時同往路 昔時は同じ路を往くも
獨往今詎知 独往 今詎ぞ知らん

と詠んで、今昔を対比して喪失感を表している。第一章で指摘したように、韋應物は、旧居、故地を再訪することが多いが、その道行で、右の

対比を用いた「傷懷」を少なからず詠っている。「哀文」との関わりを看取できよう。

以上のように、潘岳の「悼亡賦」「哀永逝文」は、悼亡詩とはジャンルを異にするにもかかわらず、韋應物は、詩語、発想、構成、句の構造も含めて、躊躇せず模倣していることが認めうるのである。

第三節 潘岳「寡婦賦」との関わり

第一・二節においては、潘岳の亡妻を悼む諸作との比較を行ってきたが、「韋詩」の潘岳との関わりは、それだけではない。山田前掲論文は子どもを詠う先例の一つとして、潘岳の「寡婦賦」(『文選』卷十六)を挙げる^②。だが、子どもの描写だけではなく、「韋詩」の詩語、モチーフ、展開は、少なからず「寡婦賦」をも踏襲している。

「寡婦賦」は、潘岳の幼なじみで義妹の夫でもある任子咸の夭折を悼み、遺された義妹の心中を推し量り、彼女に成り代わって詠んだ代作(「寡婦賦」序)である。

両親を早くに亡くして不幸に育った若妻が、結婚によってやっとつかんだ幸福を夫の夭折で失う。冒頭はその嘆きを、妻の一人称で綿々と詠う。それからの展開は、①葬儀を終えて後の空室と殯宮での悲哀。②後に喪車を出発させての送葬。③仲秋から嚴寒の冬への推移を背景に後追い自殺を思うが、幼子のために思いとどまる。④歳暮、夫の夢を見る。⑤夫を慕って山上の墓に登り、同穴を誓う。

この概要から明白なように、「悼亡賦」「哀文」二篇を合併した内容展開を寡婦の立場から詠んだ作ともいえよう。

また齋藤前掲論文は、潘岳の「悼亡詩」と「寡婦賦」を比較して、詠む主体の性差による状況の相違（夫を悼むことと妻を悼むこと）にも関わらず、同一詩語や類似表現の多さ、〈季節の推移〉〈空室の悲哀〉〈墓への登高〉などモチーフの同一性を指摘し、両者の距離の近さを明示する⁽³³⁾。さすれば、「韋詩」と「寡婦賦」との近似性も容易に推考され、事実、それは右の①～⑤の概要や後述の詩語からも、確認できる。ここではそれを前提として贅言を省き、潘岳「悼亡詩」には見えず「寡婦賦」にのみ認められる「韋詩」と共通する例を挙げる。それは、〈夢〉（十八「感夢」）のモチーフである。

「寡婦」は、日暮れて葬儀を終えると、「素帷」を垂らした部屋の空しさに心は傷つき打ちひしがれる（「摧傷」「愴惻」）。「」内の詩語はいずれも「韋詩」に見える。仲秋に至り、嚴寒の冬へと「四節は流れて忽ち代序」するが、哀しみは、ますます募る。「願はくは夢を假りて以て靈に通せんことを」と望むほどに。願望通り、夫は夢の中に現れるが、はっと驚いて目が覚める。

夢良人兮來遊	良人の來遊するを夢む
若闔闔兮洞開	閭闔（天の門）の洞開するが若し
但驚悟兮無聞	但ましく驚悟すれば聞くこと無く
超敞恍兮慟懷	超く敞恍（はつきり聞えない）して慟み懷ふ
慟懷兮奈何	慟み懷ふこと奈何せん、
言陟兮山阿	言に山阿に陟る

このように、第二節の「悼亡賦」後半および「哀文」と同型の「九歌」型騷体を用いた軽快なリズムで、悲哀を溢れんばかりに表現する。ただ夢の内容は描かれず、まさに「韋詩」と同様、「微夢」が詠まれており、「韋詩」との類似性を見出せよう。ここでは韋應物が「性差による状況の相違」と「賦」という異なるジャンルに拘泥せず、「寡婦賦」を踏襲していることに留意しておきたい。

このほか潘岳の「悼亡詩」、「寡婦賦」とともに共通する修辭上の類似性として、蟬聯体（右の「慟懷」の反復⁽³⁵⁾）や対句・疊語・双声・疊韻の多用を指摘できる。ただそれらは魏晋から顕著になった修辭主義の現れとして古詩の多くに認められ、この兩篇に特化できない。指摘するに止め、より重要な点である典故について述べる。

「潘詩」第一首第八聯は「獨無李氏靈、髣髴睹爾容（独り李氏の靈無からんや／髣髴として爾の容を睹ん）」と詠うが、これは漢の武帝の李夫人の故事（『漢書』卷九七上）である。寵愛していた李夫人の死を受け入れがたい武帝は、方士に命じて夫人の靈を呼び出させると、帳の向こうにその姿がぼんやり浮かんだという。

「寡婦賦」でも、寡婦は、初秋の靈室で、風に揺れる「靈衣（夫の衣類）」を目にしては涙にくれている。すると「冥冥にして覿ふこと罔しと雖も／猶ほ依依として以て憑附す」とぼんやりとではあるが、夫に寄り添えるような気配を感じている。

同様に、「韋詩」四「冬夜」第五聯の「帷帳徒自設、冥冥豈復來（帷帳 徒らに自から設くるも／冥冥豈復た來らんや）」も同じく李夫人の典故に基づいている。

このように、典故による三篇類似の表現が認められるのに対して、「潘詩」に見えるつぎの二つの典故は、「韋詩」には認められない。第一首十三聯「庶幾はくは時に衰ふる有らん／莊缶 猶ほ撃つべし」、第二首十二聯「上は東門呉に慙ち／下は蒙の莊子に愧づ」。「東門呉」は息子を亡くしても悲しなかったという『列子』力命に見える故事。もう一つは「莊周 缶を撃つ」の故事（『莊子』至樂³⁷）。いずれも生は「大夢」、死は「大覚」という道家思想に拠って死の悲哀を克服した二人である。潘岳は克服できない自分を恥じている。

「寡婦賦」もそれに相当するモチーフを、典故に拠ってこう表現する。「三良の秦に殉ずるに感じ、生を捐^すてて自ら引くを甘しとす」秦の穆公の死に殉じた三人（『春秋左氏傳』文公六年）と同じく、後追い自殺を考えるのである。だが「稚子を懷抱に鞠^ひひ、羌^あ低徊して忍びず」と幼子のために、思いとどまる（概要^③）。この発想は、魏・王粲「寡婦賦」の「刃を引きて以て自裁せんと欲するも、弱子を顧みて復た停む」（『藝文類聚』卷三四）に基づく。王粲は、三曹を中心とする建安七子の一人である。「寡婦賦序」に「昔阮瑀既に没して、魏文之を悼み、並びに知旧に命じて、寡婦賦を作らしむ」と記すように、魏の文帝曹丕が瑀の「知旧」に命じて「寡婦賦」を作らせたその一つである。潘岳は右の序に続けて、「余遂に之に擬し、以て其の孤寡の心を叙す」と述べ、自ら「擬作」と明記した。斎藤前掲論文は、「寡婦賦」のこの擬作性を、建安の「寡婦賦」主に「丁儀」（または「丁廙」）の妻の作と比較して、構成の一致（殯葬」「送葬」「服喪」と詩語詩句の表現の類似だけでなく、典故（『春秋左氏傳』の殉死など）がモチーフをより前景化して、共に

悲哀の社会的位相（士大夫階級社会のイデオロギーに基づく）を鮮明にしたと論ず。その意味で、潘岳「悼亡詩」の莊子の典故も同じ機能（官務復婦に通じる士大夫階級の価値観の表象）を有しており、「寡婦賦」とは「性差による状況の相違」がありながら、それらは「分断」しているのではなく「連結」していると説く。端的にいえば、「相違」と「連関」の動的相互作用が、潘岳「悼亡詩」の擬作性といえよう。

本章第一節で述べた如く、ノスタルジアに耽る韋應物には〈悲哀の切斷・止揚〉という現実的志向は皆無であり、これらの典故を踏むこともあり得ない。さらに当該例の主人公は、「寡婦」であり、「稚子」の母という「性差による相違」が、より画然としている。すなわち「潘詩」と「寡婦賦」との距離よりも、「韋詩」と「寡婦賦」との距離のほうが、遙かに遠いというべきである。それにもかかわらず韋應物は、「潘詩」にない〈夢〉のモチーフを取り入れ、「稚子恩の絶ゆるを傷む」（十二^⑦）と「寡婦賦」と同じ「稚子」の語を用いて、従前の悼亡詩には見えない子どもを登場させた。潘岳「悼亡詩」が「差異」ゆえに「寡婦賦」と連動したように、韋應物もそれとのより大きな「差異」を意識することで、自らの悲哀のあり方を対照化し、模擬せんと試みたのである。ここに「韋詩」と「潘詩」との本質的関わりを見出せるであろう。すなわち、韋應物は、潘岳悼亡詩の他ならぬ〈模擬性〉を踏襲したのである。

以上のように、韋應物の悼亡詩と潘岳の哀傷作品との関わりの本質が明確になった。先行研究が「韋詩」の新しさと指摘する〈妻像の描出〉〈子どもの存在〉〈夢〉〈今昔の対比〉は、いずれも潘岳の哀傷作品を踏

襲していた。韋應物は潘岳の模擬性に倣って、自らの悲哀を、「潘詩」のみならずジャンルを異にする「悼亡賦」「哀永逝文」そして性差のある代作「寡婦賦」(さらに建安「寡婦賦」も含めた過去の悲哀と対照化した。さらに自らの価値観との相違や「差異」をも動的に関わらせ、それらの触媒によって、自らの詩境を深め広めたのである。それこそが韋應物悼亡詩の多様性を生み出し得た動因ではないだろうか。

この特質が、そして韋應物の悼亡詩が、彼の全作品の中で、いかなる意味を有するかを今後の課題とする所存である。

注

- (1) 「故河南元氏墓誌銘 朝散郎前京兆府功曹參軍韋應物撰并書」二〇〇七年十一月、韋應物の墓誌銘(『唐故尚書左司郎中蘇州刺史京兆君墓誌銘』(丘丹書)とともに発掘された。山田和夫「新出土韋應物妻元蘋墓誌」(『中国学研究論集』第二二号、二〇〇八・十二) 訳注参照。韋應物の生卒は、陶敏「韋應物生平再考」(『唐代文學與文獻論集』中華書局、二〇一〇・四)に拠る。

- (2) 王欽臣、字は仲至、元祐の初め(一〇八六)、工部員外郎、紹聖元年(一〇九四)、集賢殿修撰から和州、饒州知事。最終官は、徽宗の時、知成徳軍。拙論の底本である四部叢刊所収『韋江州集』などの別集通行本の十四分類による体裁は、王欽臣に始まるとされる。なお、上記底本以外に、対校本として、元刻本影印『須溪先生校本 韋蘇州集』(福建人民出版社、二〇〇八年十月、「元刻本」)また適宜、以下の三校注本を参照。陶敏・王友勝校注『韋應物集校注』(上海古籍出版社、二〇一一年九月)、孫望編著『韋應物詩集繫年校箋』(中華書局二〇〇二年三月)、阮廷瑜校注『韋蘇州詩校注』(華泰文化事業股份有限公司、二〇〇〇年十一月)。併せて宋・劉須溪先生校本『韋蘇州集』(和刻本漢詩集成第八輯所収)、官板『韋蘇州集』

韋應物 悼亡詩論(承前)

(文政三年刊)、近藤元粹評訂『韋蘇州集』(嵩山堂藏版、明治三十三年五月)をも参照。

- (3) 『お茶の水女子大学中国文学会報』第三十号、二〇一一年四月。
(4) 【西晋】孫楚「除婦服詩」一首 四古四韻(『孫馮翊集』)、潘岳「悼亡詩」三首 五古三韻・十四韻・十七韻(『文選』卷二三)【齊・梁】沈約「悼往」一首 五古六韻(『沈隱侯集』卷二)、江淹「悼室人」十首 五古五韻(『江文通文集』卷四)、庾信「傷往」二首 五古二韻(『庾子山集』卷四)【隋】薛德音「悼亡」一首 五古四韻(『全漢三國晉南北朝詩』全隋詩卷三) 入谷仙介「悼亡詩について——潘岳から元稹まで」(『入矢教授、小川教授退休記念中国文学語学論集』筑摩書房、一九七四年)。
(6) 『中国学研究論集』第二十一号、二〇〇八・十二)。
(7) 「動止礼則、柔嘉端懿。順以爲婦、孝於奉親。嘗修理内事之餘、則誦讀詩書、翫習華墨」。
(8) 『颯風』第五号、一九七三・四。
(9) 山田和夫「韋應物の自然詩について——「賞」字の使われ方——」(『中国中世文学研究』第五十一号、二〇〇七・三)。
(10) 韋家は漢代より丞相、宰相を輩出した名門で、北周の韋叟(逍遙公)の流れを汲み、曾祖父待備は則天武后期の同中書門下平章事、祖父令儀は梁州都督、父爨は、宣州司法參軍。應物はその三男。元蘋の曾祖父も北魏・昭成皇帝(在位三三八〜三七六)の後裔で、唐・尚舍奉御の元延祚、祖父は簡州(四川省)別賀の平叔、父は尚書吏部員外郎の挹。蘋はその長女。
(11) 前掲論文(6) (8)。また胡旭「悼亡詩史」(東方出版中心、二〇一〇・四)第二章第二節「韋應物・斯人既已矣」でも韋詩の修辭法の一つに、對比表現を挙げている。謝衛平「論韋應物悲情詩的時空体系」(『求索』二〇〇七・六)も指摘する。
(12) 『中国文学報』四七、一九九三・十。
(13) F・デーヴィス『ノスタルジアの社会学』間場寿一等訳(世界思想社、一九九〇・三)第一章、ノスタルジアの体験、ことばと意味。
(14) 「江淹の悼亡詩について」(『日本文学誌要』第五八号、一九九八・七)。
(15) 前掲書注(13)第三章ノスタルジアとライフサイクル、成熟期・老年期の

ノスタルジア。

- (16) 春木有亮『実在のノスタルジー スーリオ美学の根本問題』エビローグノスタルジーの逆説(行路社、二〇一〇・三)は、「ノスタルジーにおいては、〈不在のもの〉が、〈現実〉であり、目の前に在るものは〈非現実〉である。ノスタルジーは、その〈不在のイマジユ〉をこにして、力強く創造する。今日の前に在ることと不在の対比をも含む〈世界の構築のすべ〉がノスタルジーの感情の中にもまるまる全部収まっており、それゆえノスタルジーは、〈構築する〉〈創造する感情〉たりうる」と論ず。一九八二〇一頁。

- (17) 「韋應物詩論——雨の時空——」『日本文学誌要』第六十六号、二〇〇二・七。「微鐘」「微雨」「微風」など韋應物は数多く「微」を用いている。(18) 「幽」を用いた評語は、「幽深閑遠之語難造」(元・倪瓚『清閨全集』卷十)、「意趣幽玄」(明・許學夷『詩源辨體』卷二十三)など。

- (19) 陶敏等校注本引劉辰翁校點、袁宏道參評『韋蘇州集』(北京国家図書館藏)論者未見。

- (20) 前掲書注(11)第二章第二節、六十頁。

- (21) 最も単純な比較として同一の詩語を調査すると、第一首には四語(「荏苒」「之子」「流芳」「春風」、第二首にも四語(「单衾」「誰與」「展轉」「長簾」)、第三首には、左の六語計十四語を見出せる。第三首に見える章詩と同一の詩語と類似の表現は、つぎの通りである。

- ⑥ 「潜翳」(五⑮)、⑦ 「如昨日」(六①、二十⑨)、⑧ 「戚戚」(十六②)、⑨ 「泣涕」(一⑮)、⑩ 「駕言」(二③)、⑪ 「徘徊」(一⑫、二五⑭)。

- (22) 『中國文學報』第三九冊一九八八・十。

- (23) 「斑鬢彫以承弁兮、素髮颯以垂領」(『文選』卷二二)

- (24) 『藝文類聚』卷三四所収を底本とし、『潘黃門集』(『漢魏六朝一百三名家集』所収)を対校本とする。

- (25) 「不造」は「成らない」の意で、転じて「不幸」を意味する。具体的に、楊家の方は、岳父、楊肇の失意の中の死(二七二年、荊州刺史の楊肇は、降伏した呉の將軍歩闡を迎えるよう命じられたが、呉の大司馬陸抗に大敗し、歩闡は殺された。その責めを負って免官され、三年後逝去。)と

その後を追った子息楊潭の死。潘家の方は、父潘比の死(二七六年頃)を指す(胡旭前掲書(11)第一章第四節十九〜三二頁参照)。

- (26) 王德華『唐前辭賦 類型化特徵与辭賦分体研究』(浙江大學出版社、二〇一〇・十)。兩漢時代は、「六言十兮、六言」という「離騷」型が主流だった(例えば、司馬相如「長門賦」など)が、魏晉に入り、「兮」字の無い六字句が大量に増え、同時に「九歌」型(特に「兮」)が継続して用いられたと説く(第三章唐前騷体新變与騷賦互滲二、唐前情愛主題騷体創作、二〇四〜二〇六頁)。

- (27) 後藤秋正『中国中世の哀傷文学』Ⅲ悼亡と送葬の文学、「悼亡賦」論——漢代から梁代まで——(研文出版、一九九八・十)の潘岳「悼亡賦」全篇の注解参照。当該解説は、二二二頁。

- (28) 藤野岩友『巫系文学論』は、「九歌」型について、「離騷」型の「遅重」に比して「音调が軽快」と論ず(『神舞劇文学』九歌の歌舞 一六七、八頁)。なお「兮」については、褚斌傑『中国古代文体概論』が、聞一多などの先行研究を次のように簡潔にまとめる。* 古代では「啊」と発音した語氣詞、* 『詩經』中にもあるが、頻度、用法、効果は全く異なり、『楚辞』の主要な特徴の一つとなっている。* リズムを調整する働きがあり、句読点の機能も有る。* 「九歌」中の「兮」は「之・而・以・然・于」などの助辞と同じ用法と意味をもっている(第二章楚辞第二節楚辞体的主要特点、六六頁)。

- (29) 前掲書注(11)第一章第四節潘岳・徘徊虚墓間二三頁。「哀文」の成立時期は、断定出来ないが、楊氏逝去直後とするなら、「悼亡賦」「悼亡詩」は逝去一年後とする。後藤氏前掲書注(27)は「哀文」「悼亡賦」は「ほぼ同時期」とする。拙論では、「悼亡賦」は一年後と断定出来ないが、「哀文」の後と考える。

- (30) 「士如し妻を帰らば 氷の未だ泮けざるに追へ」に基づく。婚姻六礼のうち、「請期」までの五礼は、氷のまだ融けないうちに終わらせて、仲春二月中に婚礼を為すべしと詠む。

- (31) 後藤氏前掲書注(27)、「送葬詩論」一〜三の詩史及び同氏『唐代の哀傷文学』Ⅱ送葬詩と帰葬詩、唐代「送葬詩」の周辺(研文出版、二〇〇六・

(二)「唐代において妻の送葬を詠じた初めての詩(四二頁)と記す。

(32) 前掲論文注(6)三『文選』の哀傷の表現の影響。

(33) 前掲論文注(22)六四〜六五頁。

(34) つぎの韋詩の詩語は、すべて「寡婦賦」に見出せる。

一⑨「傷摧」、二②「素帷」、二④二七⑦「惻愴」、四①「杳杳」、⑩
「(河)漢」、五③「車馬悲」、⑥「異存亡」、十「獨言」、十七①「霜露」②
「星漢回」⑦「空宇」

またすでに挙げた悼亡詩中の「潜翳」「徘徊」は「寡婦賦」にも見える。

(35) 「潘詩」の蟬聯体は例えば第三首で挙げれば⑫⑬⑭。韋詩では四「冬夜」
⑥⑦「驚鴻感深哀／深哀當何爲(驚鴻 深哀を感ず／深哀當に何をか爲す
べけんや)八「月夜」④⑤「翻傷清景好／清景終若斯(翻って傷む 清
景の好きを／清景 終に斯くの若し)」と用いている。ただし「潘詩」・
「寡婦賦」が換韻の箇所を用いるのに対して、「韋詩」は換韻とは関連させ
ていない。

(36) 高橋和己「潘岳論」(『中國文學報』第七冊、一九五七・十)が潘詩の対
句・疊語・双声・疊韻の多用を指摘するが、悼亡詩に特化できない。ただ
「韋詩」との関わりからいえば、特に、疊語の多用は、言及すべきである
う。「潘詩」第三首でも「凄凄」「烈烈」(③④)、「疊疊」「戚戚」(⑪⑫)
と対句で用いられている。「韋詩」では、七①「迢迢」、十②③「冥冥」
「杳杳」、十二①②「沈沈」「婉婉」、十五⑧「耿耿」などと多用されている。
旧稿(前掲論文注(17)第一章「暮雨」と「夜雨」)でも論じたように、そ
のリズムの効果や持続による拡大増幅または深化作用は、悼亡詩に限らず
韋應物詩の特質の一つに数えられる。

(37) 「哀永逝文」の末尾「重曰」にも「庶はくは莊子に愧づる無からんこと
を」と詠む。胡旭氏は、「重曰」以下は、後人の付加とする(前掲書注(11)
二三頁)。

(38) 福山泰男「建安の〈寡婦賦〉について」(『山形大学人文学部研究年報』
2、二〇〇五・二)は、「丁廋妻」の作とし、王粲、曹丕の各「寡婦賦」
に比べて完成度が高く、「潘岳が踏襲したのは丁廋の妻の作品の方」で、
潘岳の「寡婦賦」一三三句中、三六句、約三割近くが、丁廋の妻の作を踏

まえると指摘する。

(39) 前掲論文注(22)六六〜六八頁。